

「日本人はよく泣いた！」



「職場で泣いてはダメですか」という記事が目にとまった。『心の病を発症する人が増えている。欧米では家庭関連が多いのに対し、日本では職場の業務や人間関係など仕事関連が多い。職場で泣くのはダメ」という暗黙のルールは「男は弱音を吐くものではない」という考え方が反映しているから」というもの。

だが歴史を遡ると実相はかなり違う。太平洋戦争直前。民俗学の権威、柳田国男は『涕泣史談』を著した。この中で「古来日本人は非常によく泣いた民族だったが、最近の日本人はあまり泣かなくなつたようだ」と記す。それは教育レベルがあがり、ラジオの影響等もあり、言葉を使う能力が向上し、言葉で感情表現ができるようになったからとみている。

だが一方で、泣かなくなつたことを寂しがっている。人には言葉では言い尽くせない万感の思いや、深い悲哀がある。それを言葉にすると上滑りしてしまう。うまく言えば言うほど誠が消えていく。そこで、泣くという身体的表現で伝えようとしてきた。日本人は、泣くことを「洗練された文化」として育んできた。

その昔、男は美によく泣いた。須佐之男も菅原道真も光源氏も。源義経も、近松、浄瑠璃の茂兵衛も。山岡鉄舟も、金色夜叉の貫一も泣いた。義経は吉野で、安宅の関で、奥州で泣いた。泣いてヒーローになったとさえ言われる。日本人は泣くべき時に、心から泣くことを美徳としてきた。だが、ひたすら近代化の道を歩むにつれ泣かなくなつた。

柳田が最近と言つたのは、五十年から百年前のこと。丁度、維新から大戦の時期と重なる。いささか背伸びし富国強兵に突き進んだ時代。論文は「一億総火の玉」と、国民がある種のヒステリー状態の時期に書かれた。男は勇ましい兵士として、女は銃後の守りとして国に尽くす。泣くことなど許されなかつた。

戦後は？焦土と化した日本は豊かさを求めてひた走る。兵士から経済戦士へ。明るく元気に経済戦争へ従事する。泣くことは忌避された。英語に「男泣き」という言葉はない。米国では、人前で泣くと社会的信用がガタ落ちになる。

個人より組織の論理を優先する働き方に加え、米国流の価値観が社会に浸透し、男は泣けなくなつた。連動するように、女も子供も心にわだかまる様な思いを抑制するようになった。誰もが元氣印の仮面をかぶって生きている。果たしてこれが健全な社会と言えるのだろうか？

笑いには免疫力を高めるほか多くの効用がある。だが周りには、軽薄な笑いや、ユーモアにはほど遠い冗談が氾濫している。明るさや笑いが過剰に求められている。米国である実験が行われた。何人かに人生で最も悲しかったこと、辛かったことを回想してもらおう。やがてポロポロ涙をこぼし始める。すると細胞が活性化し、治癒力が劇的に高まったという。

人は言葉にならない悲しみにじっと浸ることによっても、命が蘇ってくる。ユーモア文学の大家マーク・トウェインは「ユーモアの源泉は哀愁である」と言う。真の悲しみから真のユーモアが生まれる。笑うことと泣くことは背中合わせ。辛さ悲しさを心の中に沈潜できる人だけが、真の希望をつかめる。夜の闇の深さを知る者だけが、暁の光に感動する。

日本列島は湿度が高い。乾いた空気と砂漠の大陸とは全く違う。この中で湿り気の多い人間関係や社会が作られ、独自の文化や風土が生まれた。にもかかわらず我々は、欧米流の乾いた人間関係と合理的な社会を追い求めてきた。

その結果余りに乾き、潤いのない社会になった。笑いの信仰が世を覆う中で、泣くことは疎まれてきた。しかし悲しい時には身をよじて泣き、さめざめと泣く。誰もが素直な感情を出し、普通に泣ける。社会を取り戻せないものだろうか。